

Project  A04	地域協働専攻 国際協働グループ  中高生の〈探究〉を伴走支援するプロジェクト
メンバー	[学 生] 金子 桜里／加納 芽依／菊池 優花／星 成那／瀬川 愛／萩野 葵 [担当教員] 小林 真二
<p>【背景】 探究に対する中高生のつまづきポイント(テーマ設定、筋道の立て方)に、大学生ならば斜めの関係や経験を用いて寄り添い、前進させることができるのではないかと考えた。</p> <p>【目的】 指導法の構築・実践を行なうことで、中高生へのよりよい働きかけ方を検討し、中高生のやりたい事を活かした探究を実現させる。</p> <p>【概要】 大学生自身が探究から得た経験と文献から得た探究にまつわる知識をもとに、大学生ならではの強みを生かしながら中学・高校の総合的な学習の時間・総合的な探究の時間に入り込み支援する。 そして、支援した経験を通して重要だと感じた要素をまとめて、独自の探究のガイドブックを作成する。</p>	
<p>【プロセスと成果】 まず、前期の活動について述べる。一つ目は、市立函館高等学校と北海道教育大学附属函館中学校(以降市函/附属中)への活動交渉だ。地プロの目的と各校が探究もしくは地プロに求めることをメールや話し合いを通して明確にして交渉した結果、附属中では前期にグループ探究、後期に個人探究の支援を行う機会を、市函では後期に生徒に対して探究の有意義さ、楽しさを伝えるオリエンテーションや、それをきっかけにした支援を行う機会を頂くことができた。二つ目は、質の高い支援を実施するために探究の知識を定着させることだ。探究に関する文献から、実用的な情報や知識を得たことで、実際の支援の見通しを立てることができた。三つ目は、附属中での支援だ。理想の支援プロセスは、「1.生徒のやりたい事を対話で明瞭にし、生徒に自覚させること 2.対話を通して適切な道筋を生徒と一緒に見つけること 3.生徒に考えさせる問いを投げかけ、具体的な実現方法に生徒自身が気づくこと」だった。実際には、1.生徒のやりたいことは対話で明瞭化できた。しかし、2.の道筋は、大学生が一方向的に提案してしまったため、未達成に終わった。その結果生徒主体でなく大学生が直接的に具体的な方法に誘導することになってしまったため、3.も達成できなかった。</p> <p>次に後期の活動について述べる。一つ目は、市函の先生が作ったマニュアルに生徒目線、親しみやすさを加えて生徒にさらに活用してもらえるものに改良するために改定提案をさせて頂いた。生徒が使いやすいマニュアルにするために、生徒との距離の近さを感じさせる表現や、思考の流れを具体例に即した言語化や図解をするなどの工夫を加えた。また、必ずしも探究を受験に繋げる必要はないことを表現することで、自分の「やりたい」を大切に探究を行なってほしい点をアピールした。二つ目は、市函での探究オリエンテーションの一部を担当させて頂き、生徒に「テーマ設定のコツ」を伝授するプレゼンを行なった。そこでは、「1.自分自身の「やりたい」気持ちを活かしたテーマ設定の方法 2.壮大なテーマを実現可能なテーマに育てる方法 3.日常生活の中からテーマのヒントを見つける方法」の三点を会話形式の実演を交えるなど、高校生に伝わるように工夫し、発表した。三つ目は、生徒の探究への悩みを聞くために探究の授業に入り込む、授業外時間にサポートデスクを設置するなどによる、附属中・市函での支援だ。アプローチとしては、生徒の悩みを聞き出すために、斜めの関係を活用しながら落ち着いて話ができる雰囲気づくりをした上で、生徒の本音を引き出せるように努めた。支援にあたっては、生徒がやりたい事を対話で明瞭化することと、対話を通して適切な探究テーマや探究の道筋を一緒に見つけることを意識した。四つ目は、一年間の活動を通して得た知見を成果物として形に残すことで、中高生や教員志望の大学生に探究のテーマ設定の方法を伝えられると考え、オリジナルのガイドブックを作成した。ガイドブックは、「①テーマ設定における重要項目 ②テーマ設定の方法 ③テーマ設定の具体例 ④テーマ設定における文献調査の方法」を地プロの活動をベースに、中高生を対象にしたデザインと文言を心掛けてまとめた。</p>	
<p>【総括と反省・今後の課題】 前期は実際の支援活動が附属中のみにとどまったため、楽しさ、有意義さを伝える直接的な支援機会を満足に得られなかったと感じた。また、実際の支援においても、生徒自身に考えさせるような問いかけが出来な</p>	

い場面があるなど、大学生内で理想の支援プランの共有が不足していた。総括として、支援の伴走性が不十分であったことが課題として挙げられたため、後期は文献から知識を定着させることは継続しつつ、「サポートデスク設置」「オリエンテーション」「共通の支援プラン作成」を行うという、三つの目標を立てた。

後期は、地プロの活動目的は、概ね達成することができた。加えて、前期に立てた三つの目標も達成できた。しかし、支援では情報収集で大学生側が生徒に情報を提示しすぎ、自力でのやり方を教える時間を確保できなかったため、生徒自身に主体的な気づきをさせるような支援を心がけることが課題として残った。また、ガイドブックは作成するまでにとどまり、学校現場の先生方のご意見をうかがったり、実際に試させて頂いたりするまでには至らなかったため、反省と課題として挙げられる。

私たちは、探究に関する知識を身に付け、その知識を活かした実践の中で、自分たちで更なる探究の理論を構築し、それをガイドブックとして形に残すという充実した活動内容にできたことを誇りに思う。ガイドブックの内容は、先行研究の収集に留まらず、主に実体験から作成した。実体験を根拠にしたガイドブックの作成を完遂できたことは、実践と改善を繰り返した結果だ。実際に、サポートデスクを利用した生徒から「探究が楽しい」といった声をもらったこと、継続してサポートデスクを利用してくれる生徒がいたことなどからも伴走支援として実りある活動ができたと言える。これは、自分らの活動に慢心せず、常に高い理想を掲げて、探究に関する文献を読む、サポートデスクを周知するポスターを作成する、メンバー同士で支援を振り返るなどバックヤードでも力を抜かず活動したからこそ達成できた。今後も、実践と改善を重ね、中高生が探究を充実した時間のできる伴走支援を目指したい。 【市函オリエンテーション】 【ガイドブック】



【附属中での支援】 【市函でのサポートデスク】

#### 【地域からの評価】

##### ●市立函館高等学校 探究部長 塩村亮先生からの評価

生徒にとって自分の興味関心を否定されない場(サポートデスク)があったことは大きなプラスになりました。毎回、終わってから気が付き、また忘れていたのですが、何組の誰ゼミの誰が、どんな相談をし、どんな対話をし、今後に向けてのアクションプランをどのように立てたか程度の簡単な引継ぎメモを作り、年次やゼミ担当として生徒に関わっている教員に共有しなくてはいけなかったと反省しています。

マニュアルの改定は、教材を(元)生徒目線でブラッシュアップする過程で、自分たちの言葉の選び方がいかに上から目線だったかに気づかされました。もちろん必要な上下関係はあると思いますが、過剰だったと思います。プレゼンテーションは、リハーサルがしたかったですね。カンニングペーパーはスマホではなく、紙でしたね。

今後への期待は、正直なところを言うと、ブラッシュアップを重ねながら、大学生による本校の探究支援は継続していただきたいと思っています。地プロの活動期間など継続的なかわりにはハードルが多いと思いますが、ご検討ください。

##### ●附属函館中学校 探究連携担当 櫻川祥貴先生からの評価

教員の他に伴走者として加わってもらうことで、生徒により手厚い支援ができました。また、事前に対面やリモートで打ち合わせを行い、学校側の願いに一生懸命応えようと準備する様子が見られました。生徒

との年齢も近いことから、自身の経験もふまえて自身に相談に乗る姿が印象的でした。課題点は、中学校の授業時間が日中なので、大学の講義と重なるケースがあったことです。たくさん準備をされていることを知っていたので、残念でした。今後は、実施時間や実施方法を検討し、今回以上に継続的な支援をお願いできるようにしていけたらいいと思います。

#### 【年間スケジュール】

- 4月 活動方針の合意形成
- 5月 市立函館高校、附属中との交渉
- 6月 附属中の探究支援／文献読みを開始
- 7月 附属中支援／文献読み／中間発表の準備
- 8,9月 市函マニュアルの改定
- 10月 市函にサポートデスクを設置／附属中支援
- 11月 市函オリエンテーション・サポートデスク実施サポートデスク周知ポスターの作成・掲示
- 12月 ガイドブックの作成準備
- 1,2月 ガイドブックの作成／成果発表会準備・発表

#### 【ガイドブックのダウンロード】

以下のQRコードからダウンロードできます。



※実際に学校で試してみたい、参考にしてみたいという方がいらっしゃいましたら、ご一報頂けると励みになります。改善のご意見もお待ちしております。  
( [kobayashi.shinji@h.hokkyodai.ac.jp](mailto:kobayashi.shinji@h.hokkyodai.ac.jp) )